

平成 19 年 11 月 8 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム 第 7 回講話

まず、毎回お聞きする質問を致します。

「今朝目を覚ましてからここに来る迄の間、嘘をつかなかった方、どれくらいおられますか？」

(・・・沢山手が挙がる)

嘘をついた時は心の中に何か引っ掛かりがありますから、ちょっと手を挙げにくくなります。

ところが反省しない人は、嘘をついていてもそれに気がつかない。

リップサービスをする場合は、特にそうです。

私は夜眠る時に、今日は一日嘘をつかなかったかな？ と、一日をざっと思い出すような癖が、最近付いてきています。

「今日は一日嘘をつかなかったか」「今日はいい日だったか」「どれだけ真剣に有難うございませうと言ったか」「明日は楽しみか」「運動したか」と 5 つ自問自答して、大丈夫だと思おうと満足して眠りに入ります。

そして眠る瞬間には、“来年の 1 月 26 日の年次大会で拍手が起こり、成功して良かった・・・”という疑似体験をしつつ、眠りに入るようにしています。

もう一つお聞きします。

「利によりて行なえば、怨み多し」という言葉があります。

これも質問します。

「昨日一日、目先の欲につられて、衝動的に動かなかった方はどれくらいおられますか？」

(・・・大分手が挙がる)

目先の欲につられて動くと、後でろくなことはありません。

目の前のちいさな餌につられて、ふっと飛びつくことはしないように、習慣付けると良いでしょう。

最後にもう一つ質問をします。

「昨日寝る時に、今日は一日良かった。明日が楽しみだ・・・と思って眠りについた方はどれくらいおられますか？」

(・・・大勢手が挙がる)

眠る時に、こういう事を考えながら眠る癖がついて、寝る時に爽やかな気持ちで寝ると、朝の目覚めは実に爽やかです。

今申し上げたものは、前人の知恵です。

私が考えたものではありません。

論語の中に、こういった考え方・行動をすると良いという説明があります。

それを渋澤栄一さんが『渋澤論語』に書き、私がそれを分かり易く『渋澤論語を読む』という本に書きました。

今申し上げたことが書いてありますから、どうぞご覧下さい。

先人の知恵に学ぶことは非常に良い事だと思います。

私はそういうものを学んで、自分なりに咀嚼して皆様にお伝えしています。

どうぞ良いものはご自分で咀嚼して、又、他の人にお伝え戴くと良いと思います。

レジメにそって申します。

基本哲学は「知足」です。

「おかげさまで」「もったいない」「有難うございます」・・・という考え方で毎日をご過ごしていけると良いと思っています。

これは世界で冠たる言葉です。

初めての方がおられますので、中斎塾フォーラムの目的を申します。

今地球は絶滅の危機に瀕していると言われていています。

地球が誕生して46億年、人類は7000年～1億年と言われます。

その間に絶滅の危機に瀕したことは、5回あったそうです。

現在は、地球の温暖化現象によって、第6回目の絶滅の危機のスイッチが入った。

そのスイッチを押したのは人類であると言われていています。

絶滅の危機に瀕しているのは、地球ではなく人類です。

人間が死ぬだけで、地球は痛くも痒くもない。

地球がぶるぶると身体をゆすれば、植物・動物・鉱物が消滅するだけのことであって、地球は壊れません。

そのような状況にあって、人類の為に何か出来ることはないか・・・。

日本という国は今、どんどん悪くなっています。

民主党の今回の茶番劇（小沢さんの代表辞意・辞意撤回）安倍首相の突如とした退任劇を見ても、これらは皆、目前の小利です。

安倍さんにしても小沢さんにしても体力・氣力が萎えてしまっただけの結果ですが、根底にあるものは、日本の拝金主義だと思います。

自分だけ良ければよい・儲かればよい、という考え方が根底にあるからです。

教育上の問題や政治家の問題、官界の癒着、食品の安全問題等々、次から次に毎日のように出てきますが、これらの根っこにも拝金主義があると思います。

では、どうすればクリアできるか・・・。

「足るを知る」という考え方です。

「これも欲しい」「もっと欲しい」はやめて、「ほどほどにしよう」と思うことです。

「足るを知る」という考え方が日本古来からあるのだから、これをもっと勉強し、学び直しをして、実践しようではないか。

「おかげさまで」「もったいない」「有難うございます」・・・といった言葉を、何故真剣に使わないのでしょうか。

一日一回でも真剣に心の底から言うチャンスがあれば、素晴らしいことだと思います。

中斎塾フォーラムでは、「知足」の考え方を日本各地に広げたいし、同時に世界各国にも広げたいと考えています。

中斎塾フォーラムで学んで、心が燃え上がれば必ず実行に移ります。

皆さん一人一人が「足るを知る」という考え方で、良いと思われる運動に参加されることをお勧めします。

例えば今年、年賀葉書にカーボンオフセットという寄付金付きのものがありません。

私もその葉書を会社で買うようにしました。

今後も色々な動きが、どんどん出てくると思います。

それらの動きが、地球環境に良い動きであったり、精神的に満足する、心が癒される動きにしていきたいと思っています。

それを日本だけで進めるのはもったいないですから、外国にも同じような動きが沢山ありますので、提携しながら進めていきたいと思っています。

それが結果として、地球環境に良い動きへつながるし、人類が生き延びる方向につながっていくだろうと思います。

せっかく人間に生まれて、皆さん何か良い事をしたいと思っている。

その心に火をつけて、燃え盛り、行動につながって、次の世代に良いものをバトンタッチさせていきたい。

そう考えて、このフォーラムを進めています。

その考え方で、毎回心に残る言葉を紹介しています。

今回は『渋澤論語を読む』（深澤賢治著 明德出版社）からご紹介します。

「子貢曰く、貧にして諂^{へつら}ふなく、富みて驕^{おご}ることなきは、如何と。子曰く、可なり。未だ貧にして楽しみ、富みて禮を好む者には若かざるなりと。子貢曰く、詩に云う、切るがごとく磋^とぐがごとく琢^うつがごとく磨^とくがごとしと。それこれをこれ謂ふかと。子曰く、賜^しや、始めて與^{とも}に詩を言ふべき已^{のみ}矣。諸に往を告げて來を知るものなりと。」

解説を致します。

「貧乏だけれども卑屈にならない。金持ちになったけれども偉ぶらない。こう人はどうですか。」と、子貢が尋ねました。

孔子が答えました。

「そういう人物は結構なことだ。しかし貧乏だけれども心が豊かである。金を持っていても礼儀作法をわきまえている人には及ばない。」

子貢が言いました。

「詩経の切磋琢磨のことでしょうか。」

孔子が言いました。

「お前は素晴らしい人間だねえ。お前も詩経を共に語り合える人物だったのだねえ。」
一を聞いて二を知る人間だと、孔子が子貢を褒めています。

では、本日のテーマ「経営と切磋琢磨」に参ります。

「切磋琢磨」は、もともとは宝石を作る過程からきています。

他に、人物の向上の過程を説明している言葉としても使われます。

「切」とは、宝石の原石をスパッと割る状況です。

宝石には木目のようなものがある、きちんとそこを打つと目に沿って割れるそうです。
人間で言えば社長業の場合、「切」は独立をした時です。

「磋」は、取り出した原石を鑪で砥ぐ段階です。

宝石の形になって荒っぽいものが出来てくるけれども、売り物にはならない。

しかし、これは良い商品になりそうだとか、あまり良いものにはならないだろうという判断が付けられる状態になります。

人間の「磋」の段階は、独立した後、無我夢中で働く時です。

滅茶苦茶に働きますから、あの人に頼んだらやってくれるのではないかと、回りに期待感を持たせるような社長になっている段階です。

「琢」は、砥石できれいに砥ぐ段階です。

荒っぽい宝石の形をしたものがきれいに砥ぎあがって、商品として流過程にのり始める。

人間で言うと、ライオンズクラブに入ったり、ロータリークラブや経済同友会に入って、それなりの活動をしている。

頼りがいのある人物だと回りから思われ、それに応えられるような人物になっている。

地方の名士になっているような状況です。

「磨」は、ダイヤモンドで砥ぐ段階です。

完全に磨きあがって、一級品の宝石が出来る。

どこに出しても素晴らしいと言われる商品が出来る。

人間の「磨」の段階は、仕事も良い循環で回って、次から次に良い縁が出来て、良い循環がどんどん広がっていきます。

切磋琢磨について、宝石を磨く過程と同時に、経営者として進んでいく時のレベルを説明致しました。

他にも「切磋琢磨」には、色々な解釈があることを、お話ししておこうと思います。

例えば、「切磋」とは骨とか角を細工する事で、「琢磨」とは石や玉を磨いていく事という解釈もございます。

是非、中斎塾フォーラムに参加する方々は、お互いに切磋琢磨し合って戴きたいと思えます。

ご自分がそれぞれ玉だと思って、ぶつかり合って角を取って、素晴らしい宝石になっていって欲しいと存じます。

先ほどご紹介した『渋澤論語を読む』の中身を、もう少しご紹介します。

15 ページに、渋澤栄一さんが経営について書かれた部分を紹介しています。

日本における株式会社の仕組みを導入したのが渋澤栄一さんで、近代資本主義の父と言われています。

渋澤栄一さんが、経営の根幹はただ一つ「利によりて行なえば、怨み多し」であると語っています。

そもそも會社を經紀するには、第一に必要なはこれを経紀する人物の如何にあるのである。その當局者に相當の人物を得ざれば、その會社は必ず失敗に終わるべし。明治の初めに政府の創設したる開拓會社とか爲替會社とかいふものが、大抵倒壊したのは即ちその適例である。ここにおいて余は銀行や會社を失敗なく成功せしむるには、その事に任ずる當局者をして、事業上または一身上恪循するに足る規矩準繩がなければならぬと考へたのである。・・・「利によりて行なえば、怨み多し」の句がある。これ實業家の終身恪循すべき明教にあらずや。

目先の利益につられて仕事をしてはいけない。

会社の成功・不成功は、すべて社長の人物如何・力量如何である。

社長が自分だけ儲けようと思って始めた会社は、すべて駄目になっている。

特に官界から社長を送り込んだ事業会社は、皆駄目になっているではないか、と言っておられます。

つまり経営者がどういう哲学を持っているかによって、その会社が発展するか倒産するかが決まるというわけです。

渋澤栄一さんは日本で最初の銀行を創りました。

「銀行という所は、人物を見抜いて、お金を貸し出すことが使命である」と言っておられます。

貸し剥がし・貸し渋りなどは、とんでもない。

良い人物を見抜かなければいけないのです。

相手も見ないで貸すから、サブプライムローンのようなものに引っかかるのです。

更に人物を判断するための、人物の観察法も書いています。(41 ページ、216 ページ)

渋澤老人の記憶術と言われる「三省」については、24 ページに書いてあります。

又、お客様の要求を見抜くためにはどうしたらよいかという事が、46 ページに書いてあります。

そして社長の後継者については、79 ページに書かれています。

本日のテーマを考えるにあたって、『渋澤論語を読む』を久しぶりに読み返しました。

見直しが出来て嬉しかったので、今晚は気分良く眠れます。

お時間が参りました。

本日の講話を終了と致します。有難うございました。